

ソーシャルワーク教育におけるフォトボイスを用いた省察的学習の試み

ー学生への事後質問紙調査票の結果を中心にー

十文字学園女子大学 氏名 大山博幸 (会員番号 06129)

キーワード3つ：省察的实践、自己省察、フォトボイス

1. 研究目的

近年ソーシャルワーカーの省察的实践(reflective practice)が注目されている (Gould & Taylor, 1996)。ソーシャルワーカーはこのような省察的なパラダイムによってもたらされるオルタナティブな「再構成された実践の認識論 (Gould, 1996)」によって実践をとらえなおすことができる。それによって、技術合理的・規範的なアプローチの限界を超え、ワーカーとクライアントとの「援助関係に基づいた実践 (relationship-based practice) (Ruch, 2005)」を立脚点として、クライアントの複雑で不確実な問題状況に対して、個々の状況に応じた専門性を発揮しリスクを避けずに介入していくことができると考えられている。そのため、ソーシャルワークを学ぶ学生にこの省察的实践をどのように教室で教えるのかがソーシャルワーク教育（もしくは社会福祉教育）において課題となる。

そこで研究者は、自己省察を促進するジャーナリングの手法としてフォトボイス (photovoice) に着目した。本研究ではフォトボイスをソーシャルワーク教育の手法として実践・報告している Cray Mulder & Aubrey Dull (2014)、Cray Mulder (2014) の方法を参考に、ソーシャルワーク教育において、学生がソーシャルワーク（もしくは福祉実践）に対する自分自身の態度や価値観を探求し自己覚知を獲得することができる省察的な手法としてのフォトボイスの効果を検証・評価することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

令和6年度において、研究者が所属する四年制女子大学人間福祉学科所属で科目ソーシャルワーク論Ⅲ（ソーシャルワークの理論と方法）を履修する学生を対象とした。当該授業内で学生に、あらかじめ作成された3つのプロンプト（「あなたをソーシャルワーク（もしくは福祉・対人援助）の分野に駆り立てるものは何ですか?」「ソーシャルワーク（もしくは福祉・対人援助）の分野で、あなた自身が求めているものは何ですか?もしくは、あなたは何を実現したいのですか?」「あなたがクライアントとの援助関係を生きていくうえで重要なことは何でしょうか」）に対する回答として、プロンプトに対応する3つのフォトボイス（人物以外の写真とその写真に対する物語（ナラティブ）を記述したもの）の作成を求めた。後日、作成したフォトボイスを授業内で4人一組に分かれて、相互に共有する機会を設けた。作品共有の前後に、ANTHONY (2002) らの SRIS (THE SELF-REFLECTION AND INSIGHT SCALE) (20項目、6:まったくあてはまる～1:まったくあてはまらないの6件、研究者が日本語訳) の記入を求めた。また作品共有後に向後・鈴木 (1998) の ARCS 授業評価シート (14項目、SD法により1-9点で評定)、筆者が独自に作成したフォトボイスの報

告をして他の学生との話し合いやそこから得た気づきや変容に関する質問（5項目、4：あてはまる～1：あてはまらないの4件）、フォトボイスの作成と報告の経験に関する自由記述（3項目）、対象者の年齢をたずねる質問で構成した調査票の回答を求めた。後日研究者が成果物としてのフォトボイス作品の内容分析・解釈及び調査票による結果の解析を行った。

3. 倫理的配慮

対象となる科目の受講生にあらかじめ本研究の目的を書面及び口頭にて伝え、研究協力の同意を確認できた学生に対して調査を実施した。なお本研究は、研究者が所属する大学内の研究倫理審査委員会より承認を得た（2023年11月28日承認、2024年11月13日一部修正承認）。本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

調査に同意を得かつ欠損値があったものを除いた42名を対象とした。学生によって多様なフォトボイスの作品が制作された。作品共有後に実施したSRISの結果は、因子分析（主因子法、バリマックス）により14項目に圧縮され3因子を得、先行研究をもとにF1「内省への取り組み」、F2「洞察」、F3「内省の必要性」と命名した。なお、作品共有の前後で実施した各SRISの14項目による総平均得点を比較したところ有意な差は見られなかった。ARCS授業評価シートの4つのカテゴリーにおける平均得点はおおむね中間点よりも高かったが、C（自信）は最も低かった（5.98）。またARCS授業評価シートの各14項目の平均得点を独立変数、作品共有後におけるSRISの14項目の総平均得点を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）の結果では、「関連性（やりがいがあったかなかったか）」が正の影響を与えていることが示唆された（ $\beta = .36, p < .05, R^2 = 0.13, F = 6.01, p < .05$ ）。自由記述においては3つの質問に対する回答をそれぞれ得た。特に、「フォトボイスを作成したこと自体によって生じた「自己覚知（自分自身を知ること）」があれば、それはどのような気づきでしたか」という回答においては、感情的傾向に関する自己覚知（例：感情に流されやすい）、行動傾向に関する自己覚知（例：人間関係に注目している）、資質傾向に関する自己覚知（例：想像力が豊か）といった記述がみられた。

5. 考察

学生によって製作されたフォトボイスの作品は多様な内容であった。グループでの作品共有の前後におけるSRISの総平均得点の置いては有意な差が見られなかったことから、グループでの共有経験は各自の自己省察への意識に影響を与えるものでなかったことが示唆された。またARCS授業評価シートとSRISとの重回帰分析の結果から、今回のフォトボイス作品制作に対してやりがいもしくは手ごたえを感じた学生は自己省察の意識が高まることが示唆された。また自由記述の結果から、一部の学生は自身の感情的・行動的傾向や資質的な傾向に関する自己覚知（自分自身を知ること）が獲得されたことが示唆された。